



第4回

エジプトの人たちは日本と日本人が好き

応
般

竹内郁雄 (早稲田大学)

前々回、「最近有線のADSLを引く工事が構内で始まった。しかし、…」と書いた。この原稿を書いている時点、すなわち始まってから4カ月以上経っても、工事は掘り返したままで進んでいないらしい。これは、悠久、悠久、と覚悟を決めざるを得ない。

しかし、お世辞にもよいとは言えない環境の中にあっても、優秀な学生はしっかりと研究する。私が指導している修士のG君は右手に障害があるが、左手だけで器用にキーボードを叩く。統合プログラミング環境の使いこなしのスピードにおいては凡百の情報系大学院生を凌いでいる。「そのエージェントの判断基準とデータ、もっと詳しく見れない？ その軌跡は不自然だよな？」などといったアドバイスのほとんどは見ている前で修正して実行してくれる。こんな速い反応をする学生は、私の十数年の教師経験でも片手で数えられるぐらいだ。なにか言えばポンと反応があるので、私もG君の研究には、若気を出して随分のめりこんだ。コピーミスの裏紙に、久々にいろんな図やら式やら書いて、なにか役に立つ助言ができないものかと脳漿を絞ったものだ。

さて、初回にも言及したが、エジプトは人口分布においては圧倒的に若者の国である。エジプトの現在の経済状況では、それはとりもなおさず、大学を出ても就職が困難ということである。実際、街でも、職業についていないのかな？という若い人をよく見かける。行きつけのスーパーでレジを打っている青年と話をすると、英語が喋れて、言っていることがしっかりしているので、大卒だなと思う。

大卒がエスタブリッシュした仕事につかず、在野するのだろうか。この状況は日本の昭和10年代の世相と似ていると教えてもらった。異国に行って、位相のずれた歴史の断面を見るとは、このことだろう。そんな状況でもっと上を目指したいという学生のハン

グリー精神は日本の学生の比ではない。

年齢別人口が見事なピラミッド型をしているエジプトでは、しかし、というか、それだからこそ子供をととても大切にす。街の露店で幼児の大きな写真がいっぱい飾ってあるところがあって、なんだろうと思つたら、どうも子供の写真を撮って大きくプリントする商売らしい。以前に紹介したアブドーラ著『地図が読めないアラブ人、道を聞けない日本人』によれば、コミュニティでは大人同士が「なにになににちゃんのお父さん」と呼び合うらしい。日本とは逆だ。

学期末になって分かったのだが、私が今年教えている女子学生3人はすべて子持ちである。えっ、旦那はどこに？と聞いたら、最初から夫婦と分かっている学生のほか2名は、別の専攻に旦那が同時に入学したのだそうだ。要するにみんな2+1人以上で入学したことになる。家族も入れる全寮制ならではの情景だ。もちろん託児所が学内にある。ほとんどの学生が奨学金をもらっているの、生活に困ることはないようだ。

学生たちのみならず、エジプト人は親日的である。しかもピンポイントで日本人に親近感を抱いている。JICAを通じて日本から大きな支援があることもその一因かもしれないが、これまで米国のほうがはるかに大金を使ってきたのに、米国人には親近感を持っていないらしい。日本人はアラビア語で「ヤバーニ」である。初見では中国人と間違えられることも多いが、ヤバーニと言うと突然ニコリと微笑んで会釈してくれる。アレキサンドリアの背骨のように走っているトラム(路面電車)の窓から外を見ていると、日本人と気づくやいなや街の人々が手を振ってくれる。私が借りているアパートの大家さんはカイロにある大学の先生なのだが、日本人にしか貸したくないとまで言う。

Skypeで1カ月の講義をしたあと、初めてE-JUSTに行つてしばらくして、学生たちが食堂に、ちょうど



■写真1 期末試験風景（男子部屋）



■写真2 期末試験風景（女子部屋）

訪問中の早大の上田和紀先生と私を招いて歓迎会してくれた。humble partyという断りつきだったが、エジプトの先生たちも加わり、10人程度のお茶会になった。そのとき、学生がPCを取り出して、ぜひこれを見てほしいと言う。1月25日のエジプト革命の写真集だ。このとき彼らが本当にあの革命を誇りにしているのだと実感させられた。日本人に親しみを覚えているからこそその気分の高揚の発露だったに違いない。

実際、講義をしていても、日本のいろんなことを熱心に知りたがる。ちょっとしたことを教えてあげると非常に喜ぶ。いつかは日本に行きたいのだ。今年の学生たちが、講義のあと、1回1つ日本語を教えてください、アラビア語を1つ教えるという提案をしてきた。学内に日本語教室があるのになぜ?と聞いたら、もっと細かいニュアンスについて教えてほしいと言う。日本語教室はエジプト人が教えているので、それよりもっと深く知りたいらしい。

いろんな言葉を1回に2~3個紹介したのだが、意外に奥深い。たとえば「どうも」という便利というか曖昧な言葉があるが、これについて喋り始めたら10分以上かかってしまった。でも、そう簡単には理解できなかつただろう。彼らも主に挨拶の言葉を教えてくれたが、私の持っていた入門書には書いてないような細かいニュアンスや語用法を教えてくれた。それはいいのだが、そのうち学生たち同士で、ニュアンスについて議論が始まってしまったこともあった（もちろん、アラビア語で）。

今年採用されたJICAスタッフ支援の女性は、なんと日本語1級の資格を持っている。日本人でも簡単には取れない資格だ。通勤バスの中で話を聞いたら、まったくの独学。結構多額の投資をして教材を入手し

たと言う。こうなると、どうしてそんなにまでして日本語を勉強したかったのか?と聞きたくなる。だから、聞いた。答えは「日本語の響きがなんとなく好きだから…」。これには驚いた。実は通勤バスの中では、日本の先生方が大学運営に関することなどで、かなりホットな議論をしていて、とても響きが美しいとは言えない。彼女、後悔してないかなあ、と心配になる。

話の道筋がないままに紙幅が尽きたが、試験をして印象深かった答案用紙のことについて言及しておこう。答案用紙はA4サイズの冊子になっていて、E-JUSTの紋章つきの表紙には署名欄がいっぱいある。次のページからは大学ノートのような罫線が引いてあり、全部で24ページある。たかだか90分程度の試験に24ページ?とあって、学生にエジプトの答案用紙はこうなの?と聞いたら、そうだと言う。それ全部埋めるの?と聞いたら埋まることもあると言う。実際、半分以上埋める学生がいた。ひたすら書くのだ。彼らの書き方がちょっと変わっていて、罫線をほぼ自分の体に垂直にして（英語なので）下から上へと書き上げていく。アラビア語の場合は日本語の縦書きのように書くのだろうか。写真1と2は学生の溜まり部屋で行った今年の期末試験風景である。男子と女子が隣り合った別室で受験している。ご覧のとおり、女性は完全カバー、半分カバー（正統派の黒、もっとカラフル）と三者三様であり、宗教的な制約の緩い自由なエジプトの雰囲気を表している。えっ、替玉受験? 声でわかります。なお、街では完全カバーの人は非常に少ない。

(2012年8月22日受付)

竹内郁雄（正会員） nue@nue.org

1971年東京大学大学院修了、以降、NTT研究所、電気通信大学、東京大学を経て現職。東京大学名誉教授。エジプト日本科学技術大学の立ち上げに参加中。未踏IT人材・発掘育成事業統括プロジェクトマネージャ。